国立国語研究所学術情報リポジトリ

話者交替における発話の重なり：母語場面と接触場面の会話について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): turn-taking, turn, timing of turn-taking, overlapping utterances, learners of Japanese 作成者: 木暮, 律子, KOGURE, Ritsuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002080

『日本語科学』11(2002年4月) 115-134　〔調査報告〕

話者交替における発話の重なり
――母語場面と接触場面の会話について――

木暮　律子
(名古屋大学大学院)

キーワード
話者交替，発話権，発話権取得のタイミング，発話の重なり，日本語学習者

要　旨

本稿は，母語場面と接触場面の会話における話者交替について，日本語母語話者と日本語学習者が，どのように発話権を取得しているのかをターン冒頭部に見られる発話の重なりから考察したものである。発話権取得時に見られた発話の重なりを，ターンが重なる位置と発話内容から6種類に分類し，その出現傾向と学習者に見られる特徴を日本語能力との関連において分析した。

分析の結果，終了見なし型の不一致，割り込み型の調整系と独立系の３つの重なりで母語話者と学習者に量的な違いが見られた。また，重なりが生じた要因は，学習者の日本語能力レベルによって異なり，不一致による重なりは，初級学習者では母語話者が発話の調整を行うため，中・上級学習者では，倒置や言葉の付加を行うために生じていること，調整系の重なりは，初級学習者では確認や訂正を行うため，中・上級学習者では，情報の追加や関連する質問を行うために生じていることが明らかになった。

1．はじめに

木暮(2001)では，日本語母語話者（以下，母語話者）と日本語学習者（以下，学習者）が会話における話者交替において，どのように発話権を取得しているのかをタイミング面から分析し，発話権取得のタイミングをポーズも重なりもない場合，ポーズがある場合，重なりがある場合の３つに分け，それぞれの出現頻度について調べた。その結果，重なりがある場合は，母語話者では２割程度であったが，初級，中級の３名の学習者では３割から４割見られ，上級の学習者では，取得した発話権の半数が先行発話と重なる者もおり，母語話者と量的な差が見られるという結果を得た。

中・上級学習者を対象に，discussion における turn-taking について分析した小室(1995)は，「日本人の turn-taking のモデル」として６つの型を提示し，そのなかに，先行発話と後続発話が重なる場合を挙げている。そして，モデルごとの分布状況を日本人と比較した結果，学習者には，会話の重なりを避けているという問題があると述べている。しかし，小室は重なりについて，「話し手の発話を補足するような形で始まる」ものとだけしか記しておらず，「補足」の具体的な内容やこれ以外の重なりについては示していない。

そこで，本稿では，発話権取得時に重なりがある発話権の取得について質的な観点から分析し，

重なりの性質を明らかにするとともに，学習者に見られた重なりの特徴を日本語能力との関連において考察する。

2．研究の方法

2.1．調査方法

調査対象者は，母語話者３名と ACTFL-OPI の初級から上級レベルにあたる学習者９名の計12名である。母語話者は，大学・大学院生の20代の女性，学習者は，名古屋大学の留学生で，国籍や母語，性別は様々である。学習者については，OPI の判定をもとに，日本語能力が低いと判断される順に並べ，分析の上で日本語レベルとの関連がわかりやすいよう，３名ずつ初級，中級，上級の３つのグループに分け，１から３の番号によって示した。

表１　日本語学習者の属性

	OPI 判定	性別	年齢	国籍	母語
初級１	初級－上	男性	３６	カメルーン	フランス語
初級２	中級－下	男性	３２	インドネシア	インドネシア語
初級３	中級－下	男性	２０	マレーシア	マレー語
中級１	中級－中	男性	２０	マレーシア	マレー語
中級２	中級－中	男性	１９	マレーシア	マレー語
中級３	中級－上	女性	２５	台湾	中国語
上級１	上級－下	女性	２６	台湾	中国語
上級２	上級－下	女性	２６	台湾	中国語
上級３	上級－中	女性	２６	台湾	中国語

12名の調査対象者それぞれに対し，片面15分のカセットテープを入れたテープレコーダーを渡し，親しい日本語母語話者の友人と雑談する機会があるとき，その会話を録音してくれるように依頼した。そして，収集した各組15分，合計12組180分のデータを文字化[1]し，分析のための資料とした。

2.2．分析単位

本研究では，話者交替ルール[2]に基づいて，話をする者が変わっていく過程を「話者交替」と定義し，会話参加者が発話のやり取りを交わす際の話す順序を「発話順番」と呼ぶ。

発話[3]は，一人の会話参加者が話し始めてから話し終えるまでの「ターン」と，表現形式が定まっており，相手の発話に対する理解のみを示す「あいづち」とに分けた。会話における話者交替の単位はターンであり，あいづちは話者の交替が起こったとは認めない。

なお，話者の交替と会話における役割の交替は必ずしも一致するわけではない。相手の発話を理解するために行った確認要求や説明要求などの発話は，ターンではあるが相手が話し続ける権利を奪うものではなく，その場における発話者の役割は「聞き役」であると言える。そこでさらに，本研究では会話における役割[4]に応じて，「ターン」を「話し手のターン」と「聞き手のター

ン[5]」とに区分した。このうち，本稿では，話し手ターンを分析対象とし，話し手としてターンを取り，話をする権利を特に「発話権」と呼ぶことにする。

- 発話
  - ターン
    - 話し手ターン：話し手が行う発話で，話題に関する情報の提供や話を展開させていく情報の要求を行う発話。
    - 聞き手ターン：話し手への反応を示す，表現形式が不定の発話。先行する話し手の発話に対する理解だけではなく，話し手発話に直接関与する実質的な内容を含むが，話の展開に寄与するようなものではなく，話し手発話に従属する。
  - あいづち：相手の発話に対する理解のみを示す，表現形式が定まっている発話。

3．重なりの定義及び分類

本研究では，会話参加者の発話が他の参加者の発話と同時に現れることを「重なり」と定義する。ただし，実質的な音の重なりがない場合でも，発話の前後関係から先行話者の発話が明らかに発話途中であると筆者が判断した場合には，これを重なりとして扱った。

発話の重なりに関する研究は数多く，日本語の会話によって発話の重なりの機能を分析したものには，藤井・大塚(1994)，藤井(1995)，生駒(1996)などがある。本研究では，これらの研究を参考に，前話者のターンと次の話者のターンが重なる位置とその部分の発話内容から，発話権を取得する際に見られる発話の重なりを次の図のように分類した。

①同時開始型	②終了見なし型	③割り込み型
	（1）一致	（a）調和系
	（2）不一致	（b）調整系
		（c）独立系

図1　重なりの分類

以下，例を挙げながら，これら6つの重なりについて説明する。

①同時開始型

同時開始型とは，前の話者が発話権を渡した後，参加者2人が同時にターンを開始したために生じた重なりのことで，次に挙げた会話例1がこれにあたる。

会話例1：中級学習者3

1JNS　住んでる近く？Bの，だから6階？Bの6階の棟はー，全部1年間の留学の子だからー，（あーあ。）去年の10月からずっといるのね，（ふんふんふん。）でもうみんな報告書出しちゃってー，（んー。）毎日遊んでてー，（んー。）それで9月の終

わりに帰る。
2 NNS　はーあ。報告書ーてなーに？
3 JNS　/一年間の/
→4 NNS　/あ，一応/，一年間の報告の，んーん。

ここでは，報告書というのがどういうものであるかわからなかったNNSが2NNSで情報要求発話により発話権を譲り，一旦ターンを終了したが，すぐにそれがどのようなものであるか見当がついたため，4NNSで再びターンを取り，発話を開始している。このとき，JNSは，NNSの情報要求に答えるために発話権を取得し，3JNSで説明を始めたため，両者のターンが同時に開始され，発話が重なっている。

②終了見なし型

終了見なし型とは，ターンが終了したと見なせる箇所で，もう一人の話者がターンを開始したために起きた重なりのことで，これには，前話者が実際にターンを終了した箇所と次の話者が予測したターン終了箇所とが一致するものと一致しないものとの２つの場合がある。

（１）一致

まず，一致とは，前の話者が発話を完全に言い終える前に次の話者が発話内容とターンの終了を予測し，これを迅速に受け継ぐことによって，ターン末尾の音や終助詞などが重なったものである。次の会話例２では，JNSが「～ならないよ」まで言い掛けたところでNNSが発話内容を理解し，2NNSで相手の情報要求に答えている。

会話例２：初級学習者３

1JNS　でも，今度引っ越さなければならないよ/ねえ。/
→2 NNS　/う/ん。

（２）不一致

次に，不一致とは，ターン終了と見なせる箇所で次の話者がターンを開始したが，前の話者がさらに話し続けたために生じた重なりのことである。先行するターンが倒置文になっていたり，話者がオプショナルな言葉を付加することなどによって起きる。次の会話例３では，NNSが1JNSの「～先生に会った？」という情報要求発話によってターンが終了したと判断し，これに答えたが，このとき，JNSが「大学の先生に」と，さらに言葉を付け加えたために重なりが生じている。

会話例３：中級学習者２

1 JNS　向こう帰ったときは一先生に会った？/大学の先生に。/
→2 NNS　/ええ。/

③割り込み型

割り込み型とは，前話者のターンの発話途中で次の話者がターンを開始することによって生じた重なりのことである。重なっている部分の発話内容が前話者の発話内容と一致しているか，発話が重なっている時点で前話者の発話権が維持されているか，後続発話が先行発話に対してどのような機能を担っているかによって総合的に判断し，これをさらに（a）調和系，（b）調整系，（c）独立系の３つに分類した。

（a）調和系

調和系とは，重なる発話が相手の発話内容と一致し，前話者の発話権も維持されている場合で，先行発話に対する同意・共感，関心，応答，驚き，理解などを表すものである。次の会話例４の２NNS は，相手の発話の途中で発話内容を察知し，「そーですねー。」と先行発話に対する同意を示している。発話の重なりが生じているこの時点では，まだ発話権を取得したことにならず，相手の発話権が維持されている。

会話例４：中級学習者２

1 JNS	えー？若いでしょー？でも。だってねー，まだ二十歳とか/でしょう？/
→2 NNS	/そーですねー。/んー，お母さんはまだ若い。なんか，そのー，・・

（b）調整系

調整系とは，先行発話に対する確認，訂正，情報追加，関連質問，先取り応答などを行うことによる発話の重なりで，重なり部分の発話内容が，前話者の発話内容と部分的に異なっているものである。この場合，前話者の発話は一時的に中断されるが，その後同一内容の発話が再開され，当初計画していた発話目的は達成される。次の会話例５は，JNS が何年間寮に住んでいたか聞いたところ，NNS が10年間と答えたため，さらにそれが何歳のときからのことであるか尋ねている場面である。1 JNS で「10年ていうと」と言いかけたところで，NNS はその先の，「何歳のときから？」という質問内容を予測し，2 NNS で「10歳から」と先取りして答えている。2 NNSにより1 JNS の発話は遮られるが，「何歳から住んでいたのか」という情報を得るという JNS の発話目的は達成され，すぐに 3 JNS で JNS による発話が再開されている。

会話例５：初級学習者３

1 JNS	10年ていう/と，/
→2 NNS	/10/歳から。// {笑い} //
3 JNS	//ええー？//じゃ，小学校でしょ？10歳って。

（c）独立系

独立系とは，前話者の発話途中でターンを開始することにより，相手の発話目的を達成する権利を奪っているものである。先行発話の内容をさらに展開させたり，新たな話題を持ち込むもので，先行発話に対する妨害的な割り込みであると言える。次の会話例６は，JNS が 2 JNS で和菓子屋はどこにあるのかという NNS の質問に答え，その場所について説明している場面である。し

かし，JNS がその答えを言い終わらないうちに，NNS は 4 NNS で，その店は有名であるか，歴史があるかというさらに発展した内容のターンを開始し，新たな質問を JNS に持ちかけている。JNS は 5 JNS，6 JNS でこの質問に答え，その後も場所の説明に関する発話はなされていないことから，JNS は当初の発話目的を変更し，これを断念したものと解釈される。

会話例 6 ：上級学習者 3

1 NNS	パルコのー，すぐ，奥ですか？正面ですか？パルコの。
2 JNS	んーとねー，しょう，裏っかわになるのかな。//地//下鉄から出てー，あ/の正面/,
＊3 NNS	//裏側？//
―4 NNS	/すごく/有名な//お店？すごく歴史が//あるの？
5 JNS	//すごくっていうかねー，あのー//
6 JNS	いや，そーれはねー，よくわかんないけどー，あのー（ん。）女の子に人気のある，（ん。）お店。

以上，発話権取得時に見られる発話の重なりを 6 種類に分類し，その定義について説明した。それでは，まず，どの種類の重なりがどの程度生じているか，その出現数から見ていくことにしよう。

4．重なりの内訳

4.1．母語話者

次の表 2 は，母語話者に見られた重なりの内訳と，それぞれの重なり総数に占める割合を示したものである。

表 2　母語話者に見られた重なりの内訳

	同時開始型	終了見なし型		割り込み型			重なり総数
		一致	不一致	調和系	調整系	独立系	
母語 1	0 (0.0%)	5 (35.7%)	5 (35.7%)	1 (7.1%)	3 (21.4%)	0 (0.0%)	14 (100%)
母語 2	1 (9.1%)	1 (9.1%)	4 (36.4%)	3 (27.3%)	2 (18.2%)	0 (0.0%)	11 (100%)
母語 3	1 (3.1%)	2 (6.3%)	12 (37.5%)	3 (9.4%)	13 (40.6%)	1 (3.1%)	32 (100%)
合計	2 (3.5%)	8 (14.0%)	21 (36.8%)	7 (12.3%)	18 (31.6%)	1 (1.8%)	57 (100%)

全体的に見ると，重なりの内訳上位 3 位は，終了見なし型の不一致，割り込み型の調整系，終了見なし型の一致の順になっており，不一致による重なりが最も多くなっていることが注目される。不一致は，ターンが終了したと見なせる箇所で，発話権を受け渡す側がさらに何らかの言葉を補足することによって引き起こされた発話の重なりである。したがって，この重なりが多いことは，発話権を受け渡す側が，自らの発話を調整し，相手が理解しやすいよう配慮しているとともに，発話権を受け継ぐ側も，常に相手の発話に注意を払いながらターンの終了箇所を予測し，

互いに協力して会話を進行させていこうとしていることの現れであると言える。

一方，同時開始型と独立系による重なりは全体の１割以下であり，ほとんど見られない。同時開始型は前話者のターン終了方法や発話権を取得した者に何らかの原因が見られ，発話権取得のミスと考えられること，独立系は，割り込んだ発話の内容から先行発話への妨害と捉えられるものであるため，このふたつの重なりによる発話権の取得は少ないのだと考えられる。

4.2. 学習者

次に，学習者に見られた重なりについて表３を見てみよう。

表３　学習者に見られた重なりの内訳

	同時開始型	終了見なし型		割り込み型			重なり総数
		一致	不一致	調和系	調整系	独立系	
初級１	2 (5.7%)	2 (5.7%)	24(68.6%)	1 (2.9%)	4(11.4%)	2 (5.7%)	35 (100%)
初級２	1 (2.8%)	4(11.1%)	16(44.4%)	0 (0.0%)	8(22.2%)	7(19.4%)	36 (100%)
初級３	0 (0.0%)	7(29.2%)	13(54.2%)	1 (4.2%)	2 (8.3%)	1 (4.2%)	24 (100%)
中級１	2 (5.7%)	4(11.4%)	8(22.9%)	4(11.4%)	6(17.1%)	11(31.4%)	35 (100%)
中級２	0 (0.0%)	8(20.5%)	26(66.7%)	1 (2.6%)	2 (5.1%)	2 (5.1%)	39 (100%)
中級３	2(12.5%)	1 (6.3%)	4(25.0%)	1 (6.3%)	6(37.5%)	2(12.5%)	16 (100%)
上級１	0 (0.0%)	0 (0.0%)	9(52.9%)	0 (0.0%)	1 (5.9%)	7(41.2%)	17 (100%)
上級２	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4(28.6%)	0 (0.0%)	3(21.4%)	7(50.0%)	14 (100%)
上級３	0 (0.0%)	7(15.2%)	8(17.4%)	0 (0.0%)	2 (4.4%)	29(63.0%)	46 (100%)
合計	7 (2.7%)	33(12.6%)	112(42.7%)	8 (3.1%)	34(13.0%)	68(26.0%)	262 (100%)

各学習者の，重なり総数に占める割合が第１位になっている重なりのタイプに注目してみると，初級学習者と中級２，上級１の５名の学習者では，母語話者同様終了見なし型の不一致による重なりが最も多くなっているが，その割合は，母語話者では４割程度であったのに対し，学習者では５割から７割になっている。次に，中級１，上級２，上級３の３名の学習者では，独立系による重なりの割合が最も多く，その割合は日本語能力の向上につれて増加し，特に上級学習者では重なり総数の半数を占めていることがわかる。同時開始型及び割り込み型の調和系と調整系の重なりの出現数は，母語話者と比べ全体的に少なくなっているが，中級３の学習者では，調整系による重なりが最も多くなっている。

この結果は何に起因するのであろうか。次節では，母語話者と比べ，量的な違いが見られた不一致，調整系，独立系の３つの重なりに焦点をあて，質的な観点から考察する。

５．学習者に見られる特徴

5.1. 不一致

学習者は母語話者と比べ，不一致の重なりによる発話権の取得が多かったが，なかでも特に初級の学習者においてこのような種類の重なりが多く見られた。先に，３．で不一致による重なり

が起きた要因には，倒置文などの文の構成によるものと，オプショナルな言葉が付加されることによるものがあると述べたが，不一致が起きた要因がどちらの理由によるかは，学習者の日本語能力レベルによる違いが見られた。次の会話例７，８は初級１の学習者に，会話例９は，初級２の学習者に見られた不一致の例である。

会話例７：初級学習者１

1 JNS	うん，15日はー，（はい。）その，そのセレモニーのー，祝日ですよ。祝日。休みね。/ホリデー，うん。/
―2 NNS	/あ休/み。は，はい。じゅ，じゅ，じゅ，じゅーごにちはー，（うん。）er，日曜日？

会話例８：初級学習者１

1 JNS	12階だといろいろ見えるでしょう。/外がー/，見えるね，You can see.
―2 NNS	/みえ/,

会話例９：初級学習者２

1 JNS	何と言う名前のゲレンデ？　/ゲレンデの名前は？/
―2 NNS	/あー，それはあのー，/

いずれの例でも，同一ターン内の発話終了と見なせる箇所において，母語話者が同じ意味内容を伝える別の文に，何度か言い換えを行っていることがわかる。日本語能力が低い初級レベルの学習者において，不一致による発話権の取得が多く見られたのは，このように，母語話者が学習者の日本語力を配慮して，発話の調整を行っているためであると考えられる。

一方，同じオプショナルな言葉の付加であっても，中・上級レベルの学習者の会話で見られた例は，母語話者が関連情報の添加や補足を行うためのものであった。次の会話例10では，Ｅさんにしばらく会っていないと言ったNNSに対し，JNS が 2 JNS で，「会いに行かなきゃ，レジデンスに。」と言ったあと，さらに，「当番の日教えてあげるよ」と付け加えている。このとき，NNS は，「レジデンスに。」の部分で2 JNS のターンが終了したと思い，3 NNS で「めんどくさいな。」と一度ターンを取っている。しかし，さらに JNS が発話を続けたため，この発話の終了を待ち，4 NNS で再び「めんどくさい。」と言って発話権を取得している。

会話例10：中級学習者３

1 NNS	そう，Ｅさんはほんとに久しぶりだ。（うん。）半年以上も。
2 JNS	ほんとに？会いに行かなきゃ，レジデンスに。/当番の/日教えてあげるよ。
―3 NNS	/めんどくさいな。/
4 NNS	めんどくさい。{笑い} また，そんななんか坂をのぼらなきゃ，の，のぼらなければならないでしょ。

次の会話例11でも，JNSが「日本だったら標準語って東京のことばでしょ？」と言ったところでターンを終了したと思ったNNSが2NNSで，「あ,」と何か話し出そうとしていることがわかる。しかし，JNSが「で，中国だったら北京のことばでしょ？」とさらに付け加えたため，NNSの発話とこの発話とが重なり，NNSはここで発話を続けることを諦めている。そして，その後，この発話が終了したあとの3NNSで再び発話権を取得している。

会話例11：上級学習者2

1JNS	あのね，オーストラリアに限らずね，ドイツはー，あのー日本だったら標準語って東京のことばでしょ？/で/，中国だったら北京のことばでしょ？
―2NNS	/あ/,
3NNS	え，でもー，ちゃんと，そう，そう，なんですけれどもー,

また，このレベルの学習者の会話では，関連情報の添加や補足というオプショナルな言葉の付加だけでなく，先行発話が倒置文になっていることによる発話の重なりも見られた。次の会話例12，13の1JNSはそれぞれ，「引っ越しは，大変だったでしょう。」，「家族は，みんな元気だった？」となり，語順が入れ替わる倒置文になっている。

会話例12：中級学習者2

1JNS	へー，大変だったで/しょう。引っ越しは。/
―2NNS	/うーん，バンを/借りた。こないだ。

会話例13：中級学習者2

1JNS	みんな元気だった？家族/は。/
―2NNS	/うん/，元気。

倒置文は，本来の日本語の文とは語順が異なるという点で，学習者にとっては理解しづらいものと考えられる。したがって，このような理由による発話の重なりが見られるようになったということは，母語話者が学習者の日本語能力に応じて発話内容の配慮の仕方を変えていることの現われであると言えるのではないだろうか。

5.2. 調整系

調整系とは，3．で述べたとおり，重なる部分の発話が先行発話に対する確認や訂正，先取り応答，情報の追加，関連する質問になっているものである。以下では，学習者において観察された調整系の重なりについて，それぞれの例を挙げながら具体的に説明する。

①確認

確認とは，先行発話に関する自分の理解が正しいかどうか確かめるためのものである。次の会話例14，15は，初級1の学習者に見られたもので，会話例14では「休み」という単語を，会話例15

では「医学部」の発音を確認していることがわかる。

会話例14：初級学習者１

1 JNS　金曜日。
2 NNS　先週の金曜日？
3 JNS　うん，やっだ休みだ，休みだっ/たでしょ/？
→4 NNS　/あーっあ，やす/休み？
5 JNS　うん。(ah-ah.) 学校休みでしょう。
6 NNS　ah-ah.

会話例15：初級学習者１

1 JNS　医学部ね。
2 NNS　はい，理学，er,
＊3 JNS　い，医学/部/。
→4 NNS　/い/，医学，(ん。) 医学部？
5 JNS　うん。病院の，

②訂正

訂正とは，先行する自分の発話や相手の発話のなかの誤りを正すもので，会話例16では，「遅くなる」を「遅くなりません」に，会話例17では，「あげました」「かってー」を「貸してくれました」に，それぞれ訂正していることがわかる。どちらの例でも，2 JNS，4 JNS，6 JNS で母語話者が確認や言い直しを繰り返し行っており，それが，学習者が誤りに気づくきっかけになったと思われる。

会話例16：初級学習者２

1NNS　erm，は早い，来ます。早い来て，(ん。) erm，〔2.8〕 uおそく，urm,
＊2 JNS　遅くなる？
3 NNS　遅くなる。
＊4 JNS　遅く/なる？/
→5NNS　/遅く/なりません。
＊6 JNS　遅くなりません？
7 NNS　ええ。なりません，です。

会話例17：初級学習者２

1NNS　あ，はい。あのー，これは，erm，う，M さんのー，(うん。) 服,
＊2 JNS　うん。を貸してもら/った？/

3 NNS　/ええ。/M さんが，あー，あげました。（はーん。）え，あーあれ，あの，いえ，//えー//
＊4 JNS　//貸して//くれたの？
5 NNS　ええ。（ん。）かってー，
＊6 JNS　貸してく/れました。/
→7 NNS　/貸して/くれました，はい。

この２つの例は，初級２の学習者に見られたもので，このような訂正は，学習者自身の日本語能力の不足が原因となっているものであるが，上級学習者では，誤りが自らにあるというよりも，会話相手が解釈を誤り，その誤解を解くために訂正を行うものが見られた。次の会話例18では，自分の発話が間違って解釈されていることに気づいた NNS が，JNS の発話途中でターンを取り，「台湾語」を「中国語」に訂正している。

会話例18：上級学習者２

1 JNS　・・・それに，台湾だ，ってもねえ，あの台湾語を，だけ，だけを使っていたら，ねえ，あのこっく
→2 NNS　台湾語じゃ，わたしの意味台湾語ではないで/すけどー，中国語，/
3 JNS　/うん，いや，あの/，台湾の，つこっ，台湾で，習う，北京語。

③先取り応答

先取り応答とは，前の話者がターンを終える前に，その発話の途中で先取りして答えることである。次の会話例19，20で母語話者は，「友だちはインドネシアの人か」，「マレーシアでは免許も18歳で取ることができるのか」という質問を行っているが，学習者はその質問が言い終わらないうちに，「いいえ」，「18歳」とそれぞれ質問に対する的確な答えを返していることがわかる。

会話例19：初級学習者２

1 JNS　うーん，インドネシアの/人/？
→2 NNS　/いい/え，あのー，じ，日本人。

会話例20：中級学習者２

1 JNS　ふーん。免許もそーだよねー。
2 NNS　免許も，/うーん，そう。/
3 JNS　/めんきょ/ーも，//18歳？//
→4 NNS　//18歳。//はい。

④情報の追加

情報の追加とは，先行発話に関連した情報を付け加えるものである。次の会話例21では，「今は引越しの時期ではない」というJNSの発話に対し，NNSが「不動産屋の人も，あまりアパートが空いていないと言っていた」という自分が聞いた関連する情報を提供するために1JNSの発話途中でターンを始めている。

会話例21：中級学習者1

1JNS	・・・うん，あの，ただ，今はどちらかというと，あまりみんなが動く時期じゃないでしょ？引っ越す時期じゃないから，（うん。）日本は4月からふつう始まるからー，（ああ，そう。）うん，だからみんな，3月ぐらい，まで，住んでー，それからうちに帰る，とか（ああ，そう。）2月ぐらい，で，帰る，とか，（うん。）いろいろあるんだけどー，だから，4月ぐらい，から，住み始める人が多いねー。（そーですねー。）うんうん。ま今はあんーまり，動いてないんだけどー，
―2NNS	ああ，そうそう。（うん。）あのー，そのー，会社，そのー，アパート，探す会社もー，（うん。）言ってたけどー。（うん。）それは，あまり，い，ない。あまり，ない。アパートは。（うんうん，そう，ねー。うーん。）だから今は，ずーっと捜してー，（うーん。）一番，安い，一番，（うん。）近い，（うん。）一番いいアパートに住む希望，それ，希望は。

次の会話例22でも，「関西の人は関西弁が一番だと思っている」というJNSの発話に対し，NNSは1JNSの発話途中で，「関西の人は自分が話していることばを標準語だと思っている」というテレビで得た情報を提供していることがわかる。

会話例22：上級学習者2

1JNS	・・・あの，自分の，その，方言に対する意識の差だと思うんだけどー，（ああー。）だから，関西の人はー，だいたい関西弁が，い，一番だと思ってるからー，
―2NNS	そうそうそう，なんか前，テレビで見たよ。あの関西の人はね，（うん。）ちょ，自分がい，しゃ，話してることばは，標準語と思っていますよ。/ふふふ。/
3JNS	/そう/。一般的にそういう人が多いからね。・・・

⑤関連する質問

情報の追加が，先行発話に関連した情報を提供するものであるのに対し，関連する質問とは，先行発話に関連した情報を要求するもののことである。次の会話例23では，「アパートのとなりの子が部屋にあまりいない」というJNSの発話に対し，NNSが「どこへ行ってたの？」と情報要求を行っている。

会話例23：中級学習者3

1JNS	・・・602がオーストラリアの子でー，603がー，この子がまた，どこだ，どこだ，

となりの子なんだけどー（んー。）顔を合わせればわかるんだけどー（んー。）国がわからない。（ふふふ。）あんまりいないのよー，この子ー，部屋にー。で，/ほんと/

−2 NNS　/どこへ/行ってたの？

3 JNS　んー，そう，ほんとに住んでたのかなって思う。（{笑い}）で，時々洗濯物を干してるとー，途中に，横に干してあるから，あ，いるんだなって思うけどー，・・・

以上，調整系の重なりの種類について，学習者で観察された例を挙げながら説明した。ここで，母語話者及び学習者に見られた調整系の重なりの内訳について調べた結果をまとめると，次の表のようになる。

まず，下の表４から母語話者では全体的に情報の追加や関連する質問を行うためのものが多いことがわかる。

表４　母語話者の調整系の内訳

	確認	訂正	先取応答	情報追加	関連質問	調整系総数
母語１	0	0	0	2	1	3
母語２	0	0	1	0	1	2
母語３	0	1	2	7	3	13
合計	0	1	3	9	5	18

次に，表５で，学習者の結果を見てみると，確認や訂正を行うためのものは初級１と２の日本語能力が低いレベルの学習者に，情報の追加や関連する質問を行うものは，中級以上の学習者に見られるという特徴があることがわかる。

表５　学習者の調整系の内訳

	確認	訂正	先取応答	情報追加	関連質問	調整系総数
初級１	2	2	0	0	0	4
初級２	1	6	1	0	0	8
初級３	0	0	2	0	0	2
中級１	0	1	0	5	0	6
中級２	0	0	2	0	0	2
中級３	0	0	1	1	4	6
上級１	0	0	1	0	0	1
上級２	0	1	0	1	1	3
上級３	0	0	0	0	2	2
合計	3	10	7	7	7	34

日本語能力が低い段階で，確認や訂正を行うためのものが多いのは，先に挙げた会話例14，15，16，17からもわかるように，日本語の単語の意味や発音に自信がなかったり，自ら発言した発話

に誤りが見られるというような日本語能力の不足が影響しているからであると言える。そして，関連情報の追加や質問を行うものというのは，先行する発話内容だけでなく，関連する知識への検索なども必要になり，より迅速な理解力かつそれを表現するだけの日本語力が求められるため，このような発話権の取得はより難しいのではないかと考えられる。

5.3. 独立系

学習者は母語話者と比べ，独立系による重なりの割合が多く，なかでも，上級レベルの学習者では，この重なりによる発話権の取得が重なり総数の半数を占めている。このような発話の重なりは，前述したとおり妨害的な割り込みと考えられるものであり，それが，このような高い割合で，しかも日本語能力が高いレベルの学習者において見られるということは問題であると言える[6]。

ここでは，独立系の割り込みがなぜ起こったのか，その理由について見ていくことにする。次の会話例24は，引っ越す場所について，JNS が NNS に御器所はどうかと提案している場面である。

会話例24：中級学習者 1

1	JNS	ねえ。だから，今度は，（うん。）御器所のほうに行ってみてー，なんか本山店，
−2	NNS	うん，なんか，僕はー，夏休みのあとー，（うん。）原付を，買いたいからー，（ほう。）うん。（うん。）それは，だいじょぶと思います。
3	JNS	ふんふんふん。何を買いたいって？
4	NNS	ん，原付の，スクーター？
＊5	JNS	あー。/原付？/
6	NNS	/プログラム？/
7	NNS	げん，原付ー。ああ。（{笑い}）原付ー。（{笑い}）あー，げん，まずは，原付を（うんうん。）買い，買うと思います。（あっ，そっか。）次はオートバイ。（あーそっか。）大きいオートバイ。
＊8	JNS	そうかそうか，うん，そうね，原付あれば便利だよねー。
9	NNS	うーん，そうですねえ。
10	JNS	ふーん。そっか，じゃあ，やっぱり本山店，だけではなくって御器所の方も捜してー，（うん。）でー，/御器所とか川名のへん，安いところ/
−11	NNS	/まあ，ぼくの/先輩はー，（うん。）まあ，だいたい，あのー，みんなはー，（うん。）あの川名，のほうで，（うん。）御器所のほうで住んでいます。（ふーん。）はい。（そっかそっか。）

2 NNS の学習者の発話は，「御器所は大学からは少し遠いが，原付を買うのでそこに住んでも大丈夫だ」ということを言おうとしていると考えられ，内容的には先行発話との関連が認められる。しかし，この発話により，3 JNS から原付に関するやり取りが始まってしまい，JNS の発話計画は

一時中断されている。このとき，NNSは，「本山店だけではなく御器所の方にも行ってみるのがよい」というJNSのアドバイスが終わるのを待ってから，「そうですねー。御器所は遠いけど，夏休みに原付を買うので，・・・」というかたちで発話権を取得すれば問題はなかったと言える。そして，原付に関してのやりとりが終わった10JNSでJNSは再び「じゃあ，やっぱり本山店，だけではなくって御器所の方も捜してー，・・・」と話の流れを元に戻しているが，NNSはさらにここでまた，1NNSで「知り合いにも御器所の方に住んでいる人がいる。」という関連情報の提供を割り込みによって行っている。

2NNSも1NNSも，発話内容自体に問題はなく，このような関連情報の提供は，話の展開に有効に作用するものであると言える。しかし，それをいつ言うかという発話権取得のタイミングに問題があるため，発話内容自体はJNSの発話を支持する協力的なものであるのに，相手には，自分の発話を遮る妨害的な発話という印象を与えてしまっていると思われる。この会話例の3JNSでは，突然割り込んできたNNSに対し，「何を買いたいって？」と聞き返しており，JNSは「原付を」の部分が聴き取れなかったものと判断される。しかしこのときJNSは，すぐに尋ねるのではなく，NNSがターンを終了するのを待ってから質問していることがわかる。学習者も，このような母語話者の発話権取得方法に学び，相手が発話を言い終えるまで待つ姿勢が必要であると言える。

次の会話例25は，「栗きんとんは，白あんか」というNNSの質問に，JNSが答えている場面である。

会話例25：上級学習者3

1NNS	それは白あん？
2JNS	あれはね，栗とー，おいもをまぜ/たり，/でもあの//会社会社とか//和菓子やさんによって，
＊3NNS	/あー。/　//おいもとー。//
―4NNS	最初はー，うちの近くにー，（うん。）栗きんとん本家っていうお店が（んー。）ありまして，それはわたしは栗きんとんていうのは店の名前だと思って，・・・

ここで，NNSは，「栗とおいもをまぜたものである」という自分が求めていた情報が得られるとすぐに，2JNSの発話を打ち切り，4NNSで，栗きんとんに関する別の情報の提供を始めていることがわかる。このような自己の発話の優先は，次の会話例26でも見られる。

会話例26：上級学習者3

1NNS	すごく有名な/お店？ すごく歴史が/あるの？
2JNS	/すごくっていうかねー，あのー/
3JNS	いや，そーれはねー，よくわかんないけどー，あのー（ん。）女の子に人気のある，（ん。）お店。

＊4 NNS　あ，女の子に？
　5 JNS　うん。だからその辺でーあのー会社に行ってる人た/ちがー/，
ー6 NNS　/あ，じゃー/，すごくあのー，色とか飾りとか凝ってるお店//っていうの？//
　7 JNS　//あっ，そうでも//ないよ，そういうのじゃ/なくってねー/
ー8 NNS　/じゃ，どうして/女の子に，
　〔1.5〕
　9 NNS　あの，テレビに出たんですか？

ここでは，JNS がNNS の問いに対する説明を行っている最中にも関わらず，女の子に人気があるということを聞いた NNS が5 JNS の発話を遮り，自分が今聞きたいと思っていることの方を優先させ，6 NNS で次の質問を始めている。また，7 JNS の「そうでもない」という発話を聞くとすぐに「じゃ，どうして，女の子に」と再び情報要求を行っているが，その答えは，7 JNS の発話を最後まで聞けば聞き出せたものと思われる。8 NNS の後の1.5秒のポーズは，このような割り込みによる発話権の取得が立て続けに起きたために生じたものと考えられ，ポーズ後のターンも NNS が取得していることから，自己の発話を優先させた割り込みは，発話権の独占を招くものとして，注意しなければならないだろう。

先の表２，表３で母語話者と学習者の割り込み型の類別割合を比べると，母語話者では独立系がほとんど見られず，調和系の割り込みが多いことが注目される。上級学習者には，このような調和系の割り込みは全く見られなかったことから，先行発話に対して協力的な働きを行う発話権取得方法を身につける必要があると言える。

６．まとめと今後の課題

本稿では，母語話者及び学習者を対象に，発話権取得時に重なりがあるターンについて，そこで見られた重なりを６種類に分類し，それぞれの出現傾向について調べた。その結果，終了見なし型の不一致，割り込み型の調整系と独立系の３つの重なりで母語話者と学習者に量的な違いが見られた。この３つの重なりにおける学習者の特徴は，以下のようにまとめることができる。

１）初級学習者に不一致による重なりが多いのは，母語話者が学習者の日本語力を配慮して発話の調整を行っているためである。一方，中・上級学習者では，倒置文，関連情報の添加や補足を行うための言葉の付加によって不一致による発話の重なりが生じている。

２）調整系の重なりは，初級学習者では確認や訂正を行うためのものが，中・上級学習者では，情報の追加や関連する質問を行うためのものが多い。

３）独立系の重なりは，妨害的な割り込みと考えられるものであり，自己の発話を優先させることなどによって生じている。このような割り込みは，日本語能力が高いレベルの学習者に多く見られたが，発話権の独占を招く恐れがあるため，相手が発話を言い終えるまで待つ姿勢が必要である。

しかし，今回の調査は，母語話者３名，学習者９名と調査対象者の人数が限られており，学習

者の性別や年齢，母語の統一もなされていない。したがって，今回の結果を一般化したり，学習者の特徴が日本語能力レベルの違いによって引き起こされたと結論づけるのは危険である。

話者交替の方法は，言語によって，また，同一言語の話者であっても個人差が見られる可能性がある。今後は，調査対象者の補充，条件の統一を行ったうえで，日本語会話における適切な話者交替について考えていくとともに，学習者に見られた問題がどのような要因によって引き起こされているのかを特定したいと思う。そのためには，学習者の母語の対照会話分析を行い，日本語会話との相違点を探ることも欠かせない。

また，発話権の取得は，前の話者のターン終了方法と密接に関わるものであるため，母語場面と接触場面の母語話者でターンの終わらせ方に違いが見られるかどうかについて調べることも重要である。今後，このような点を視野に入れ，さらに研究を進めていきたい。

注

1　資料の文字化は，以下の表記方法を用いた。なお，会話例には，説明に該当するターンがわかりやすいよう，注目するターンの発話者記号の前に矢印（→）を付した。

/　/　発話の重なりの始まりと終わりを表し，/　/の中の発話が別の話者の/　/で挟まれた発話と同時に発せられたことを示す。発話の重なりが同一行，または次の行でも見られ，どことどこの発話が重なるのかわかりにくい場合には，読みやすさを考え，//　//という記号も同様に用いた。

〔　〕　〔　〕の中の数字で表示されるポーズの長さを示す。小数第二位を四捨五入した数値で示した。

？　疑問符ではなく，上昇のイントネーションを示す。

，　ごく短い沈黙，あるいはさらに文が続く可能性があることを示す。

。　下降のイントネーションで文が終了することを示す。なお，次に発話が続くのかどうかの判断がつかない場合は，このような記号（「，」「。」）は付けないこととする。

｛　｝　｛　｝の中は，笑い等の非言語的な行動であることを示す。笑い声がはっきりと聞き取れる場合は，音声をそのまま記す。

（　）　（　）の中の発話が，あいづちであることを示す。

＊　その発話が聞き手ターンであることを示す。

A・B　母語話者の会話におけるターンの発話者を示す。Aは調査対象者である母語話者を，Bは会話相手である母語話者を示す。

JNS・NNS　接触場面の会話におけるターンの発話者を示す。JNSは母語話者を，NNSは学習者を示す。

2　話者交替ルールとは，Sacks et al.(1974)によって提唱された発話の順番取りシステムのことである。以下にその概略を示す。

1）すべてのターンにおいて，最初のターン構成単位の最初の「移行適切箇所（TRP)」において，

a）現在の話者が次の話者を選ぶ場合，選ばれた者が話す権利を持ち，次のターンを取らなければならない。この場合，他の者は誰も権利を得ず，そこで交替が行なわれる。

b）現在の話者が次の話者を選ばない場合，他の誰もが話し始めることができるが，最初

に話し始めた者が話す権利を得，そこで交替が行なわれる。

c）現在の話者が次の話者を選ばず，誰も話し始めない場合，現在の話者が，話し続ける。

2）最初のターン構成単位の最初のTRPで，（1 a）も（1 b）も適用されず，（1 c）の条件のもとで現在の話者が話し続けた場合，次のTRPにおいて（1 a）－（1 c）が再び適用され，話者の交替が起こるまで反復される。 Sacks et al. (1974：704)

3　本研究では，「発話」を一人の会話参加者のひとまとまりの音声言語連続で，音声的，統語的なまとまりによって区切られるものと定義する。1つのターンは，1つ以上の発話から構成される。

4　会話における参加者の役割は，話題に関する内容を話したり，話を展開させていく行動をとる者を「話し手」，相手の発話を聞く作業を中心として，その発話を理解するための行動をとる者を「聞き手」とする。

5　本研究で「聞き手ターン」として分類した発話は，従来の研究で「バックチャネル＋α」（伊藤1993)や「相づち発話」（野畑1996)と呼ばれていたものとほぼ一致する。具体的には，先行発話の繰り返しや言い換え，先取り，感想，情報の補足，先行発話を理解するために行った確認要求や説明要求などを指す。ただし，このような発話のあと，先行発話に直接関与する内容以上の情報が付け加えられている場合は，話し手ターンとして扱う。

6　しかし，上級学習者の独立系の多さは，上級レベルの学習者の母語がすべて中国語であることから，中国語の会話における話者交替の方法が影響したということも考えねばならないだろう。また，表3において，同じく中国語が母語である中級3の学習者では独立系は1割程度であったことを考えると，上級学習者において独立系が多く見られたことは，日本語の会話能力を身に付けていく上での発達的な段階ととらえることもできる。したがって，この点を明らかにするためには，さらに日本語能力が上の超級レベルの学習者を調査するとともに，中国語会話における話者交替の方法を分析する必要がある。今後の課題としたい。

引用文献

生駒 幸子（1996)「日常会話における発話の重なりの機能」『世界の日本語教育』6，185-199，国際交流基金日本語国際センター

伊藤 博子（1993)「談話の指導――バックチャネルからの展開――」『日本語学』12-8，78-91，明治書院

木暮 律子（2001)「日本語母語話者と日本語学習者による発話権取得のタイミング――出現頻度とポーズがある発話権取得の特徴――」『平成13年度日本語教育学会第1回研究集会予稿集』25-26，日本語教育学会

小室 郁子（1995)「"Discussion"におけるturn-taking――実態の把握と指導の重要性――」『日本語教育』85，53-65，日本語教育学会

野畑 理佳（1996)「対話における聞き手の言語行動――相づち的な発話による聞き手の参加――」『平成8年度日本語教育学会春季大会予稿集』127-132，日本語教育学会

藤井 佳子（1995)「発話の重なりについて――分類の試み――」『言語文化と日本語教育』10，13-23，お茶の水女子大学日本言語文化学研究会

藤井 佳子・大塚 純子（1994)「会話における発話の重なり――協力的側面を中心に――」『言語文化と日本語教育』6，1-13，お茶の水女子大学日本言語文化学研究会

Sacks,Harvey,Emanuel Schegloff and Gail Jefferson (1974) A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation. Language 50. 696-735.

（投稿受理日：2001年７月31日）

木暮　律子（こぐれ　りつこ）
466-0823　愛知県名古屋市昭和区八雲町33 クオリシティ山手320
052-833-2242
kogure@lang.nagoya-u.ac.jp

Japanese Linguistics 11 (April, 2002) 115-134 〔Report〕

The overlap of utterances in turn-taking:
Japanese conversations in native and contact situations

KOGURE Ritsuko
Graduate Student, Nagoya University

Keywords
turn-taking, turn, timing of turn-taking, overlapping utterances, learners of Japanese

Abstract

This paper investigates overlapping utterances in turn-taking in conversations by native speakers and learners of Japanese. Overlapping utterances in turn-taking are classified into 6 types,by the overlapping position of turns and content of overlapping utterances. Characteristics of overlapping utterances were analyzed according to the level of Japanese proficiency of the learner.

The results of this research show that learners differ from native speakers quantitatively in the occurrence of overlaps of the discord type in closing turns, the interrupt type when used as overlap for adjusting and the independent interrupt type. Examination also reveals that the cause of overlapping utterances in learners differs by the level of Japanese proficiency in the following respects: Overlaps of the discord type which occur in novice learners are caused by native speakers who, in the preceding statement, adjust utterances for the learner. In the case of intermediate and advanced learners, it is caused by the preceding speaker's use of inverted utterances or addition of optional utterances. Overlaps of the adjusting type by novice learners occur when the speaker wants to confirm and correct utterances of the preceding speaker. In the case of intermediate and advanced learners, adjusting type overlaps occur when the learner wants to add or ask related information to utterances of the preceding speaker.